

■手を差し伸べられて

大阪の吹田市民病院に転院しましたが、そこは心臓が悪い人や脳にガンがあるような重症患者の6人部屋でした。私は、ベッドが3つ並んだ真ん中で寝ていて、その隣におばあちゃんがいました。ある夜に、そのおばあちゃんが自分の死期を感じたのでしよう、私の方へ手を差し伸べて、じっと見つめてきたのです。私は寝返りも打てない状態でしたが、なんとかその人の力になりたいと思って、にじり寄って、手を差し伸べるけど、届かない。届かないけれど、目だけは「がんばりなさいよ」という思いを込めて見つめていたら、その方はいっけりと笑って息を引き取られました。

その経験から私はこれくらいなら人の役に立てると感じました。もう少し生きていると、人の役に立つことが出来るだろうし、がんばらないといけないと思うようになり、捨て鉢になっていた気持ちが生きる努力に変わりました。それから一生懸命治療に向き合って、今日の体調はこうだった、こういう手当をされて、こういう結果が出たということを書きながら、医師と二人三脚で闘病生活をしてきました。そうすると、元気も出てきてベッドから降りて歩行練習をするようになりました。

生きる

第2回 生きる努力

辻川郁子



つじかわ ふみこ / 1929年
生まれ。38歳の頃に整腸剤
キノホルムによってスモンを
発症。薬害スモンの運動に参
加し、薬害根絶と患者救済の
ために活動している。スモン
の会全国連絡協議会事務局長

■長屋での生活

そして、1968年に退院できることになりました。入院前、私はガンを患った両親と3人で生活をしていましたが、入院している間に兄が両親を自分の家へ引き取ってしまいました。私がスモンだと両親や兄たちには伝わっていたようです。その頃は感染症だと思われていたので、私の住む家も家財道具もすべて処分されていました。私には退院した先の帰る家がありませんでした。

そんななか、解雇撤回の闘いをしていく組合の仲間が援助をしてくれて、長屋を借りて暮らせるようになりました。一人での生活は、伝い歩きで洗濯物を干したり、軽い食事を

作ったりはできませんでした。調子が悪いと3日間食事が摂れないこともありました。1969年の梅雨、湿気の多い時期は痛みが増し、足の裏に針山の上に立たされたような痛みがありました。立つと余計に痛むので、足は突き出してお尻と手の平でいざりながらトイレに行くような状態でした。それに耐えられなくなると、家の近くを誰かが通ると、大声で「助けて」と叫んで、気づいてくれた人が救急車を呼んでくれました。その後は、入退院をくり返しながら、生活をしていました。

スモンの原因がキノホルムであると発表される少し前の1970年3月に、初めて医師から「あなたはスモンだ」と告げられました。それで

も私は、自分がスモンだとは納得できませんでした。なぜかというところ、スモンだと神経障害が残ります。私は治らない病気ではない、なにかのまちがいで私は治るんだと思っていました。

スモンの原因がキノホルムと発表されてから、私は自分がスモンだとすれば、キノホルムを飲んだという記録があるはずなので、以前の病院に調べに行きました。すると、キノホルムを8ヶ月間飲んだ記録が出てきました。医師は、「術後だから、薬を慎重に扱ったつもりだったけれど、妊婦や幼児にも安心・安全と宣伝して、大量に売られた薬の毒素が消化器内に蓄積されるとは思わなかった」ので、長期に渡って投薬してしまっただけ、申し訳ないことをした」と謝罪しました。そして、その証明書を書いてもらいました。



▶スモンを報じる新聞(又全協編「スモン訴訟全面解決報告」感謝の集会「人間の尊厳を求めて」より)